

萩市郷土博物館研究報告

第 6 号

萩市郷土博物館
1994



はじめに

近年の社会情勢の急速な変化に伴い、「萩市の民俗」も変貌を遂げ、伝承されなくなりつつある生活文化も少なくありません。萩市郷土博物館では、1989年度より「萩市の民俗」調査に着手し、その成果を様々な形で記録に残し保存すべく努力しております。

1991年度には、萩市三見の民俗調査を、三見地区の方々と熊本大学民俗学研究室と三見公民館の協力を得て実施することができました。そしてこの度、昨年度に続き調査成果の一部を報告することになりました。調査未了で内容的には不十分な所もありますが、その点は今後の調査で補っていきたいと考えております。本報告をご叱正いただくことで、より充実した「三見の民俗」調査報告書をまとめることができればと考えております。

先人の生活を知り、現在の私達を確認することは、より良い未来の郷土を模索するために大変重要な事です。そのためにも、郷土の民俗調査を今後も継続して実施し、その成果を順次報告していくなければならないと考えております。

萩市郷土博物館の民俗調査や報告等の活動が、郷土に対する理解を深める手掛かりになり、かつまた、民俗学研究に多少なりとも役立てば幸いに存じます。今後とも、博物館活動にご理解とご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

終わりに、快く民俗調査にご協力下さいました三見地区の方々と、調査にあたっていただきました熊本大学民俗学研究室の安田宗生先生と学生の皆さんに、厚く御礼申し上げます。

1994年3月

萩市郷土博物館

調査の概要

1. 調査の目的

- ・近年の社会情勢の急速な変化に伴い変貌し消滅しつつある民俗を、様々な形で記録し保存することを目的とした。
- ・市内の他地区や萩市以外の地域の民俗との比較により、萩市の民俗の特徴を明らかにできるような、全般的な民俗資料の収集を目的とした。
- ・民俗資料の消滅や流出を防ぎ、郷土の民俗を再認識する手掛かりを提供することを目的とした。
- ・萩市郷土博物館が、利用者に対して、展示や講座を通じて提供する様々な情報を得ることを目的とした。

2. 調査事業の主体と調査担当者

- ・調査事業は、萩市郷土博物館が主体となり実施した。
- ・具体的調査は、熊本大学文学部の安田宗生助教授の指導により、熊本大学民俗学研究室の大学院生と学生を中心とした龍田民俗学会員、並びに萩市郷土博物館学芸員が、萩市三見地区の方々と三見公民館の協力を得て実施した。

3. 調査地域と調査対象

- ・旧三見村全域の、有形無形の民俗全般を調査した。

4. 調査期間

- ・龍田民俗学会員が、1991年7月に予備調査として3日間、同年7月から8月にかけて本調査として8日間、同年11月に補充調査として3日間実施した。萩市郷土博物館学芸員は、この期間以外にも調査を実施した。

5. 調査方法

- ・日本民俗学の成果をもとに、調査担当者が三見地区の方々と直接対話することで民俗全般を聞き取るという方法を採った。

6. 調査結果の処理

- ・調査結果は、調査者各自でまとめ、調査野帳の写しと共に、萩市郷土博物館に提出した。

目 次

はじめて

調査の概要

目 次

凡 例

三見地区概要

地 図

IV. 信 仰 伝 承

1. 漁 民 の 信 仰	1
伝承者Aさん	2
伝承者Bさん	6
伝承者Cさん	9
伝承者Dさん	12
伝承者Eさん	14
伝承者Fさん	17
伝承者Gさん	20
伝承者Hさん	22
伝承者Iさん	23
伝承者Jさん	25
伝承者Kさん	29

凡 例

1. 本書は、1991年度に萩市三見地区において実施した萩市郷土博物館事業の「萩市民俗調査」と、それ以降に継続実施した同地区民俗調査の調査報告書である。
2. 本書は、1993年度に発行した『萩市郷土博物館研究報告第5号』「三見の民俗」調査報告書の続編である。紙幅の関係でIV章1項のみの報告となった。
3. 本文中で、民俗語彙とみなされるものは最初にカタカナ表記し、その後は漢字が当てられるものは漢字表記とした。一般的には、フナダマサマは船靈様と表記されることが多いが、ここでは当て字不明ということでカタカナ表記とした。
4. 伝承者別に幾度かの調査で得られた伝承をまとめているが、伝承者の順番について規則性はない。また、伝承者の特定を避ける意味からも、あえて生年を大まかな記述とした。
5. 総ての伝承者に対して、用意した同じ調査項目について一つ一つ確認するというような形の調査は行っていない。あくまでも個人の経験を語っていただく中で、折りに触れ関連の質問をしながら伝承を集積してきた。伝承の濃淡や差異に関しては、調査者の質問の不適切さが原因の一部として考えられる。
6. 本書の記述は、伝承者が個人の経験を一人称で語るという形を取っているが、実際には萩市郷土博物館の学芸員清水満幸が、幾度かの調査で集積された伝承の内容を後にまとめ直したものである。従って、文責は萩市郷土博物館にある。
7. 本書に使用した写真は、萩市郷土博物館学芸員が撮影した。
8. 本書の編集は、萩市郷土博物館学芸員が行った。

三 見 地 区 概 觀

萩市三見は、萩市の西部に位置する。面積は24、37km²で、北は日本海に面し、東は旧山田村に、南は旧山田村木間に、西は大津郡三隅町に接している。

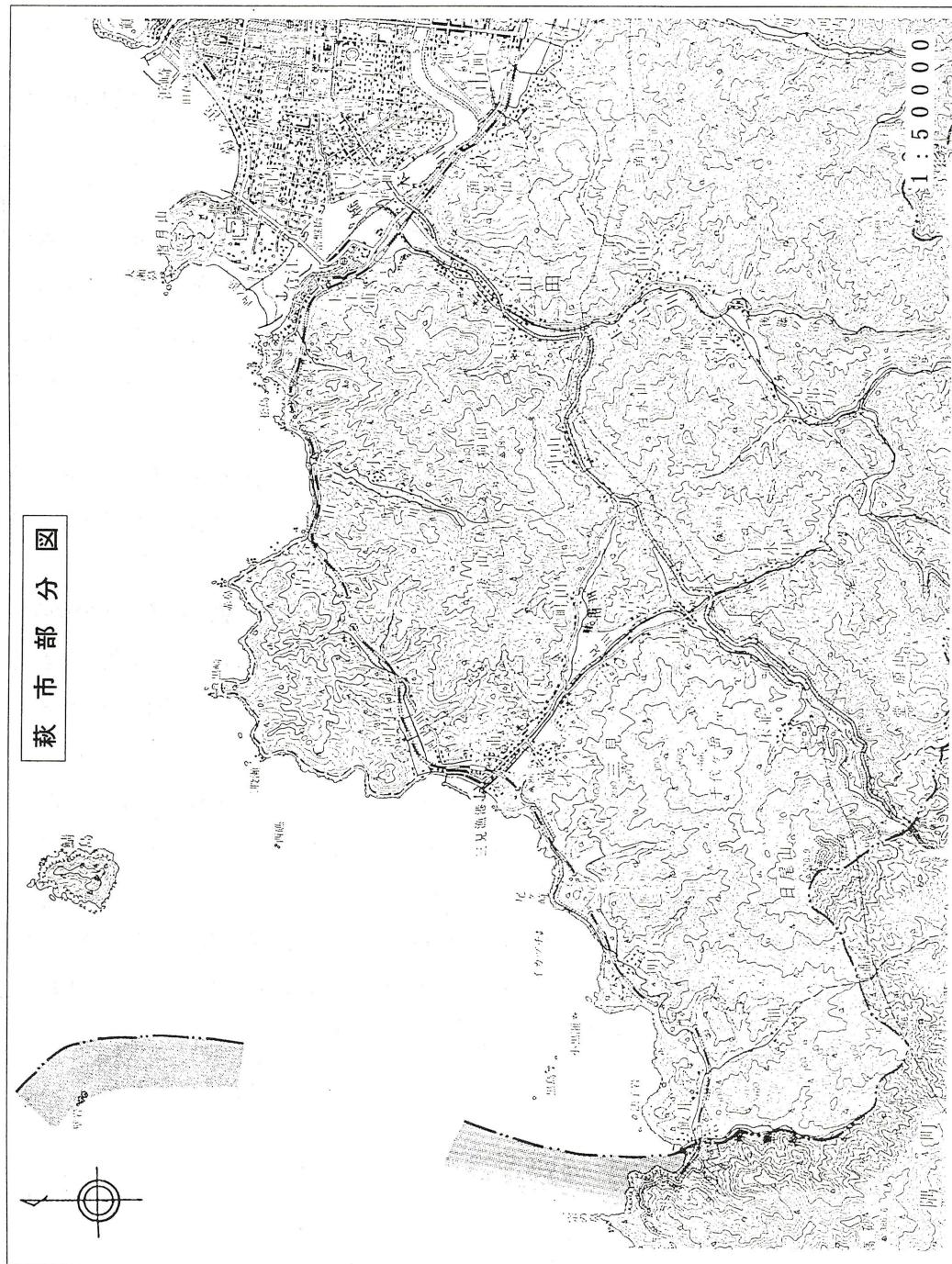
地区の大部分が山地で、地区内は5水系に分けられる。最も大きい三見川水系に沿って手水川、床並、市、吉広、畦田、石丸、蔵本の各集落が展開している。また、三見川河口の東、日本海に面して、地区内で最も戸数の多い浦の集落が展開している。中山、河内の各集落は、それぞれ地区的東南部と東北部で、玉江川水系と河内川水系に沿って展開している。明石と飯井の集落は、地区西部の山地が日本海に迫った所に展開している。全体的に平地は少なく、三見川と河内川の中下流で比較的広い水田が耕作されている。

三見という地名の由来は、「地下上申」によると、往古、三位中将重平が安徳天皇を守護して三見村の坂井という磯に上陸して村内に入ったことにちなむとされる。現在も、三位と呼称していたのが後に三見に転訛したという伝承が聞かれる。

歴史的には、三見郷という郷名が、文和元年（1352年）の「大井八幡宮御祭礼郷々社頭座配帳」に初出する。江戸時代には、萩藩領当島宰判に属していた。「地下上申」には、床並村、手水川村、三見市、中山村、河内村、蔵本村、明石村、飯井村の小村があったことが記載されている。また、「防長風土注進案」には、三見市組、吉弘組、手水川組、床並組、中山組、石丸組、河内組、蔵許組、明石組、飯井組の小村があったことが記載されている。三見浦は、萩藩領浜崎宰判に属し浦方支配となっていた。その後、明治22年（1889年）町村制施行により阿武郡三見村となり、昭和30年（1955年）に萩市と合併して萩市三見となった。

人口は、元文5年（1740年）475戸、2093人、安政年間（1854～1859年）428戸、2225人、明治24年（1891年）505戸、2820人、昭和5年（1930年）619戸、3240人、昭和30年（1955年）683戸、3720人、そして平成3年（1991年）651戸、2131人となっている。

萩市部 分図



IV. 信 仰 伝 承

1. 漁 民 の 信 仰

この項では、特にフナダマサマに対する信仰に注目して報告を行い、併せて三見浦の漁民の経済的生活や信仰的な生活についても触れてみたい。

フナダマ信仰は、一般的にフナダマサマと称される神靈に対する信仰で、船を操り海をよりどころとして生活する人々が、広範に、かつ伝統的に伝えてきている。信仰の対象となるフナダマサマの神靈は船に宿るとされ、その神靈を祭祀し信仰することで、船と乗船者が守護され、豊漁が約束されると考えられている。

三見浦においても、フナダマサマに関する伝承は一般的に聞くことができ、多くの人々がフナダマ信仰を伝えている。ただし、伝承の内容は伝承者により濃淡があり若干異なっている。他の伝統的生活文化に関する伝承が、時代とともに希薄になっていく傾向が有ることを考えると、三見浦におけるフナダマサマに関する伝承の濃淡や差異は、その伝承が消滅しつつあることを示すものなのかもしれない。しかし、信仰というものが非常に個人的な心意に支えられていることを勘案すると、伝承の濃淡や差異は、もっと別な理由によるということも考えられる。つまり、伝承を身につける時期や経緯との関連、本人の経験や深層心理との関連、他の信仰との関連等々が、伝承の濃淡や差異に大きく影響することも考えられるのである。

以下では、三見浦におけるフナダマ信仰について、いつどこでどのような経緯でその伝承が身につけられたのか、また具体的にどのような伝承が現在伝えられているのか、そして他のどのような伝承とともに人々の生活に拘わっているのか等々に注目して、伝承者の方が伝えられているものを個々に報告したい。

紙副の関係で、なるべく異なった漁業経験を有しておられる方、永い漁業経験を有しておられる方の伝承を報告した。他にも多くの方々からお話を伺っているが、いずれ稿を改めて報告したい。



大敷網の網干し

伝承者Aさん

漁業歴

Aさんは明治30年代の生まれ。

三見浦で生まれ、幼児期は父親の仕事（呉海軍工廠）の関係で呉で過ごす。小学生の時に三見に戻り、祖父や父親などと漁に出始める。16歳の時に、下関で手縄船に乗っていた兄がコレラで亡くなったため、次男だが家を継ぐことになった。最初は主に父親と共に小型の船で沿岸漁を行ったり、他の家の船に乗り組み漁を行ったりしていた。

小学生の時には、既に自家の船に乗って、ワカナ網漁や鯖の焚き寄せ漁の手伝いをしていた。ワカナ網漁の季節には、ワカナが回游してくると急ぐに小学校まで知らせがあった。浦の子供達はそれを聞くと学業を放り出して走って家に帰り、自家の船に乗り組み出漁していた。乗船した人数に見合う網を積むことができたので、子供もこぞって船に乗っていた。実際に網を投入したり引き揚げたりはできないが、ワカナを追うために石を投げたり海面をたたいたりしていた。

鯖の焚き寄せ漁は夜間の漁で、小船で出漁して沖でカガリ（カガリ火、松明）を焚いて鯖を集め、そのまま静かに艤を押して大敷網まで誘導するためその名がある。一般的には、カガリを焚く者と艤を押す者と二人で出漁した。細かく割った肥松を焚き続けてカガリとするが、これを子供が手伝っていた。当時の大敷網は、垣網に沿って入ってきた魚が、そのまま置いておくと逃げてしまふ仕組みになっていた。そのため大敷網の傍らで網を揚げる者を乗せた船が待機しており、鯖が誘導される度に網を揚げていた。鯖を焚き寄せた船には、その都度魚の分配があった。手伝いの子供にも、アイゴというタマ（タモ網）一杯分の分配があった。

他家の船に乗り組んだのは小学校高等科を卒業してからで、数え年16歳の時であった。飯炊きとして、鰯網漁や羽魚網漁の船に乗り組んだ。一般的には、アカアモン（若者連中）に加入したら一人前とみなされた。乗り組んだ当初は一人前には働けなかったが、飯炊きとして炊事をしながら、漁や海のことを見聞きして身につけていった。

その後徴兵検査に合格して工兵隊に入隊し、除隊した後は再び羽魚網漁や鰯網漁に携わっていた。日支事変で招集を受けて帰ってからは、青島の手縄網漁の船に乗り組んでいた。戦時中から戦後しばらくは、対馬方面へイカ釣り漁に出る船に乗り組み、戦後は大敷網漁に参加していた。70歳近くまで、乗組員として漁に携わってきた。

フナダマ信仰

フナダマサマは、漁の神様であり、船と乗組員を守って下さる神様だと聞いている。フナダマサマと呼ぶが、どういう字を宛てるのかは分からない。御神体が有るかどうかも良く分からない。

船大工の棟梁が進水式の折りに、何か御神体のような物を胴の船梁に納めるとは聞いている。これを、何か有った時に入れ換えるようなことは聞かない。

フナダマサマは女の神様で、女性を船に乗せるとリンキを焼かれるので、昔は絶対に女性を船に乗せなかった。一人でも何人でも、女性を乗せるということは無かった。最近は夫婦船といって、夫婦で乗り組んで出漁する者も少なくない。

昔は胴の船梁の所にホンボ（本帆）の帆柱を立てていた。胴の船梁には、あてがった帆柱を囲んで支える細工が施してあり、この箇所をアマグチという。フナダマサマはこのアマグチの所におられると考えていた。従って、フナダマサマへの供物はアマグチの傍らに置き、手を合わせるのもアマグチに対してであった。

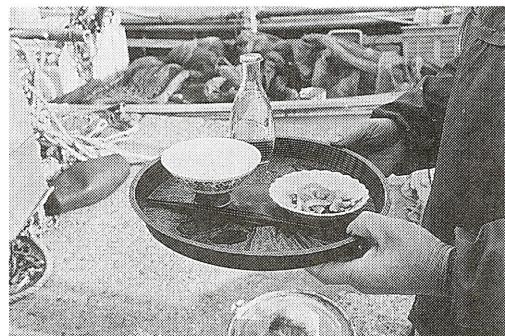
フナダマサマは、夜にチッチッチッチッと虫の鳴くような声を発せられる。年輩者はこれをフナダマサマのオイサミと言っていた。オイサミは昼には聞こえない。停泊している時でも、操業中でも、航走している時でもオイサミは聞こえた。乗組員の総てに聞こえていた。隣で操業中の船でも聞こえていたと思う。聞こえてくる場所は定まっておらず、船内外のいたる所から聞こえていた。船端などから盛んに聞こえる時に、年輩者が「フナダマサマがおいでたから時化るかもしけん」と言っていた。実際にオイサミが激しく聞こえる時には、時化ることが多かった。機械が導入されてからは、オイサミが聞こえなくなった。

船を所有する者は、フナダマサマへ毎月1日と15日と28日にゴゼン（御膳）を供えた。炊いたばかりのご飯と刺身とお神酒をのせた膳を船に持参し、フナダマサマと竜宮様に供えて拝み帰ってきた。フナダマサマに供える時には、胴の船梁の上アマグチの傍らの三所にご飯と刺身を盛り、それにお神酒を注いだ。竜宮様へは、

船のマエブネ（左舷側）から海へご飯や刺身を

落とし、お神酒を注いだ。御膳を持参するのは一般的には船頭であった。フナダマサマを拝む際に、唱え言を唱えるようなことはない。キスな者（信心深く縁起をかつぐ人）は、出漁前とか帰漁後に、毎日のように御膳を供えていた。竜宮様へ前船から供え物をするのは、フナダマサマは前船から船に乗られるからと聞いている。ちなみに、網を投入したり引き上げたりの作業は、ウシロブネ（後船、右舷）の方で行っていた。

船上でご飯を炊いた時には、メンタキ（飯炊き）と呼ばれる炊事役が、羽釜の蓋にシャモジで軽くひと掬いほど取り初め、二山に盛ってフナダマサマに供える。オハツ（オハチサマ）を上げると言っていた。アマグチに供えられない時には、羽釜の蓋に取り初めることでフナダマサマに



フナダマサマの御膳

供えることになった。

正月三ヶ日にもフナダマサマに御膳を供えた。ご飯の代わりに雑煮や黒豆を供えていた。壱州対州（壱岐対馬）へ出漁するようなオオブネ（大船）を所有する家や船頭を務める者の家では、元日にフナダマサマのオイワイと呼ぶ重ね餅を船に持参し、フナダマサマに供えていた。そのオイワイは、家に持ち帰って11日のフナマツリまで床の間に供えておいた。フナマツリというのは正月11日に行われる行事で、船主や船頭と乗組員とが揃って船に乗り、フナダマサマにその年の安全と豊漁を祈願することになっていた。この日オイワイはお神酒と刺身と共に船に持参し、フナダマサマに供えていた。安全や豊漁を祈願した後一同でお神酒をいただき、続いて船主や船頭の家で宴会を催した。

これらの他に、フナダマサマの祭祀を行う機会はない。また船以外の場所でフナダマサマの祭祀を行うことはない。

俗　　信

船上で猿の話をしてはならない。どこそこに猿が居たということを話しただけで、年輩者に怒られた。サルという言葉を使ってはならないということだが、理由は分からぬ。猿を何か別の呼び名に言い換えることはない。

船上で口笛を吹いてはならない。理由は分からぬ。

梅干しの種を海に捨ててはならない。捨てる時化るという。副食として梅干しを船に積み込むことは有ったが、梅干しの種は捨てずに持ち帰っていた。火床の傍らに、梅干しの種を蓄える竹筒を用意していた。

調味料としての酢は、沖に持って出なかった。理由は良く分からない。また、四つ足の肉は持つて出るどころか、家において食べることもなかった。

船のオモテ（船首側）で小便をするものではないという。船の艤の舵床に立ち、舵床に設けてある帆柱を立て掛ける鳥居状のヨコガミにつかまって用をたした。

海にキレモノ（刃物）を落とすことを嫌った。刃物には柄が付いているため、刃が下になって海底に沈み、竜宮様を刺すことになるからと聞いている。落とした際には、潮音寺（天台宗）でお断りのため御祓いをしてもらっていた。

ホトケ（水死人）をみつけたら、必ず連れて帰っていた。鯖島の沖で一度拾った経験があるが、「軽うなれよ軽うなれよ、連れていぬるから。ええ成仏をしてくれよ」と言って、マエフネ（前船、左舷側）から船に引き上げた。船のオモテの方へ乗せて帰港し、港に横付けし、前船から陸に上げた。この時のホトケは三見浦の者だったので、家族が引き取り弔った。ホトケを拾うと漁をするといって、しばらく豊漁が続いた。ホトケが漁をさせるのだと聞いている。ホトケを見て

拾わぬ者は無い。拾う際に問答をするようなことは無い。また、拾ったホトケを個人で供養するようなことは聞かない。女は仰向けに、男はうつ伏せに漂っている。

昔地先で遭難者があり、死体が上がらなかった時に、鶏を船に乗せて搜す方法について年輩者が話をしていたことを覚えている。船に乗せた鶏が鳴いた所を捜すというものだったと記憶しているが、他所での例だったかもしれない。

家族に不幸があった時には、7日間は出漁しなかった。子供が生まれた時には、しばらくの間は自宅に帰らず、他の家に寝泊まりして出漁することもあったと聞いている。

かつては、出漁する際に、家を出て船に乗るまでの間に女性に会うと出直すという者が多くいた。女に会うとマンが悪いとか、漁が無いと言っていた。

不漁が続く時には、船頭と乗組員が一同で八幡宮へ参詣してお神樂を上げてもらい、お神酒をいただいた後に小宴会を催した。豊漁の祈願のために、八幡宮に参詣することは多かった。壱岐対馬方面へ出漁する前には、萩松本人丸神社にお神酒と魚を持って参詣し、豊漁を祈願してオツウヤを行い、お札を受けて帰っていた。津和野のお稻荷様へも、豊漁祈願で参詣していた。羽魚漁で壱岐対馬へ出漁する途中に、津屋崎（福岡県宗像郡）に寄港して宮地様へ参詣していた。

飯炊きとして初めて船に乗り組んだ時に、岬や難所を通る際に、ツンブリコ（転回）をさせられたことがある。年輩者から、飯炊きがツンブリコをせぬと船を通してもらえないと言われた。初めての出漁以外にも、飯炊きとして乗船している間に何度か経験した。後輩の飯炊きも、年輩者に言われてツンブリコをしていた。ショウバノハナと呼ばれる通（長門市）の突端沖、ミサキと呼ばれる川尻岬沖（油谷町）、角島（豊北町）と本土の間の海士ヶ瀬等が、通過する際にツンブリコをしなければならない場所であった。

木造船の頃は、月に一度位はフナタデを行っていた。陸に引き上げた船の船底を焼いて、船に付着する虫や海藻やカキ等を取り除くことをフナタデという。竿先に着けたカガラと呼ぶ鉄の網の中で肥松を焚いて、その炎で船底を焼いていた。フナタデが終わったら、船頭の家でタデオミキ（タデお神酒）といってお神酒をいただいていた。

港の東のセンゾクの沖に竜宮瀬と呼ばれる瀬があるが、大敷網漁や鰯網漁の帰りに、その瀬に捕れた魚の1コン（匹）を投じていた。漁獲を感謝し、次回の豊漁を祈願して魚を投じると聞いている。

アゴ網漁や大敷網漁で、その年初めてアゴ（飛魚）が捕れた時には、一匹丸ごと黒焼きにしてフナダマサマに供えていた。他の魚を黒焼きにすることは聞かない。

手縄網漁の船は、金曜日に船出することを嫌った。

延縄漁などで、エド（餌）を掛けて道具を海に投じる時に、ポー、ポーサマ、トーエベス、トーエベッサンなどと唱えていた。唾を餌にかけて投じることもあった。いずれも、漁獲があるよう

にという呪いのようなものと聞いている。道具を揚げ始める時にも、同じような言葉を唱えていた。

伝承者Bさん

漁業歴

Bさんは、大正初年の生まれ。

初めて漁に参加したのは10歳の時で、ワカナ網漁の船に乗り組む。この場合、漁に参加したといっても、実際に網を投入したり引き揚げたり等の作業は行わなかった。ワカナ網漁の取り決めでは、たとえ10歳の子供でも、乗船することで一人につき網を1反積み込むことができた。つまり、子供を含めて4人乗船すれば4反の網を積み込むことができ、それだけ1隻あたり多くの漁獲をあげることができた。

本格的な漁の経験を積むのは、尋常高等小学校を卒業してからであった。タイナワ（鯛縄）と呼ぶ延縄漁で自家の船に乗り組み、三見近海で操業した。乗り組んで3年近くは、メシタキ（飯炊き）といって船上での炊事一切を行わなければならなかった。一般的に、その船で最も漁経験の浅い若い者が、飯炊きをつとめた。炊事をしながらも漁を手伝い、次第に漁具の整えかたや漁法を覚え、また海に関する様々な知識を身につけていった。この鯛縄では、ナガレといって壱岐対馬方面に出漁する船も多かった。

昭和4～5年頃からは、カジキアミとかハイオアミ（羽魚網）と呼ばれる流し刺網漁で、自家の船に乗り壱岐方面に出漁した。この羽魚網漁では、昭和10年頃まで台湾近海に出漁する船もあった。羽魚網漁の漁期は、盆過ぎから11月頃までであった。父親は昔からこの羽魚網漁を行っており、羽魚網漁船の船頭であった。

12月頃からは、三見近海でイワシアミ（鰯網）漁を行った。オオバイワシを流し刺網で漁獲したが、これも自家の船に乗り組み操業した。三見近海での鰯の漁期は、4月の大歳社の祭りの頃までで、それ以降は北鮮の清津や新浦の港を根拠地として、朝鮮半島近海で操業した。萩松本の吉村ゼンコウ氏が彼地で問屋をしており、獲れた鰯はそこに水揚げしていた。

6月頃に三見に帰ってきたが、その後は船を陸に引き上げ、小船を使用して沿岸で漁を行うか、



羽魚網漁の灯樽（右）と鰯網漁の灯樽（左）

次の漁の準備を行った。また、業者に頼まれて夏橙を大型の漁船に積み込み、北九州や朝鮮へ運ぶこともあった。

壱岐対馬や北鮮方面への出漁は、資材や燃料の不足や乗組員の不足のため、大戦中に中止された。

フナダマ信仰

フナダマサマは船の魂のようなものと考える。人によってまちまちだが、八幡宮の神官や船大工の棟梁に、新造船の進水の際に魂を船体に込めてもらう。船大工棟梁が魂を込める場合は、胴の船梁に5円玉などの御神体のような物を納めていた。何を納めるのかは船大工棟梁しか知らず、漁師は具体的には知らない。

フナダマサマにどのような字を宛てるかは分からぬ。

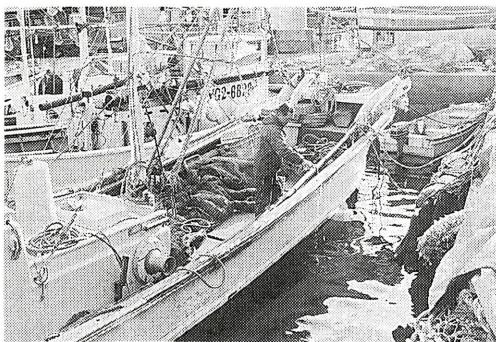
フナダマサマは女の神様だから、女を船に乗せるとリンキを焼かれるという。昔は女性を船に乗せることは無かった。

フナダマサマには海上での安全を祈願する。フナダマサマを熱心に信仰し大切にする者は、時化の時にもフナダマサマの加護があると親に言い聞かされた。実際に、フナダマサマや船を大切にする者が、時化に遭って漂流したが隱岐の島に流れ着いて助かったこともある。

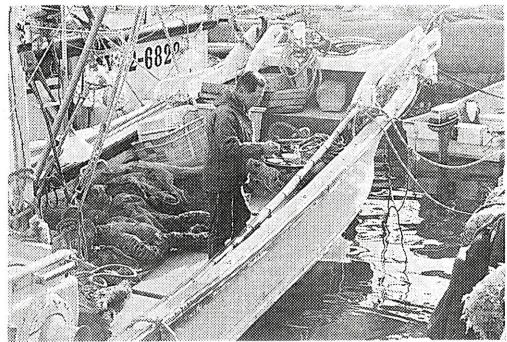
フナダマサマは、夜船上で寝ているような時に、チチッチチッといった虫が鳴くような音を発せられることがある。これをフナダマサマのオイサミという。年輩者の中には、オイサミは何か吉凶の知らせという人もいた。しかし、オイサミと具体的な事象とは結び付けては考えない。オイサミは、乗船している者すべてに聞こえた。オイサミが聞こえるのは船内のいたるところからで、一定していない。機械船になってからは、オイサミを聞くことは少なくなった。

昔から月の1日と15日には、フナダマサマのゴゼン（御膳）と呼ぶ御神酒とご飯と魚を小さい器に取り分けてのせた膳を、船頭がフナダマサマに供える。一般的には船頭が供えるが、船頭の息子や孫などが御膳を供えることもある。御膳を持って船に乗る際には、可能ならばマエブネ（左舷側）から乗ってウシロブネ（右舷側）から降りる。乗船したら御膳を胴の船梁かブリッヂの上に供え、ご飯と魚を三所に盛り、各々に御神酒を注ぐ。船梁に御膳を供えるのは、そこに船大工棟梁がフナダマサマを納めているからで、神棚は無いがフナダマサマはそこにおられると考えた。続いて、海の神である龍神と明神に供えるために、ご飯と魚を海に投じ、御神酒を注ぐ。これは船のマエブネで行う。いずれへ供える時も別に唱え言は発しない。

船上で飯を炊いた時には、オチル（飯櫃などにご飯を移す）前に、羽釜や飯櫃の蓋に2杓子程取り分けて、御膳と同じようにフナダマサマに供えていた。魚をさばいた時にも、切り身を少し取り分けて供えていた。船上でフナダマサマに飯や魚を供えるのは、メシタキの役割であった。



お神酒を注ぐ（後船）



ご飯と魚を投じる（後船）

月の1日と15日や船上での炊飯時以外には、正月の三ヶ日間も御膳を供える。正月なので、雑煮や黒豆やスルメと御神酒を供える。また直接船上に供えることはしないが、フナダマサマのオイワイと呼ぶ重ね餅を、船頭の家の床の間に供える。このオイワイは、年末の餅搗きの際に、家のオイワイ等の他の供え餅と共に作る。床の間には正月11日まで供えておくが、家の中にフナダマサマを祀ることはない。

羽魚網漁や鰯網漁を行う大型の船を持つ家では、この正月11日に昔はアミイワイ（網祝い）を行っていた。網祝いは豊漁と航海安全を祈願する行事で、その船の船頭と乗組員が参加する。床の間に供えていたフナダマサマのオイワイと御神酒を持って船に乗り、フナダマサマと網とにそれらを供え、潮と御神酒を注いだ後に一同で拝み祈願する。フナダマサマのオイワイは、槌等で割って供える。供えた御神酒はその場でいただく。そしてその後、船頭の家などで宴を催す。

不漁や大漁の時に、フナダマサマに対して特に何か祈願したり御礼したりすることはない。他にフナダマサマが好まれる事とか、逆に嫌われる事等も聞いていない。フナダマサマが移動されるような事も聞いていない。

俗　　信

龍神様はナガムシ（蛇）と聞いている。海や水の神様と考える。刃物を海中に落とさないように心がける。刃物には柄が付いているため、海中に落とすと刃先が下になり、龍神様に刺されることになる。落とした場合、潮音寺でおことわり（祓い）をしてもらう者もいた。

豊漁祈願をリョウモウシ（漁申し）と呼ぶ。正月元日や初めて出漁する日の前には、昔は船頭と乗組員とが一同で八幡宮に参詣し、神官にお祓いをしてもらい、お神酒をいただいていた。

羽魚網漁や鰯縄漁で壱岐対馬方面へ出漁する前には、萩市松本の人丸神社へ船頭と乗組員が一同で参詣することが多かった。オツウヤといって、豊漁祈願の後に神社拝殿で飲食しながら夜を明かした。御札を受けて帰ってくる。また、津和野の稻荷神社に豊漁祈願のために参詣することもあった。鉄道が開通する以前は、津和野まで歩いて参っていた。

あまりに不漁が続く時にも、船単位で漁申しを行っていた。八幡宮に参詣してお祓いをしてもらい、神社拝殿や船頭の家などでオツウヤをしていた。フナダマサマに直接祈願したり、何か働きかけるようなことは無い。どのような意味があったのか分からぬが、漁申しの際にタクアンを丸ごと食べさせられたことがある。

船上では、口笛を吹くことや鳴り物（楽器類）を使用することが忌まれた。つい口笛を吹き、年輩者からよく叱られていた。福が逃げるからとも聞いているが、理由はよく分からぬ。

また、出漁中に海に梅干しの種を捨てることが忌まれた。捨てると海が時化ると聞いている。玉江の漁船が時化でよく難儀するのは、梅干しの種を海に捨てるからと、年輩者に言い聞かされたことがある。船上で食事をした際には、ヒドコ（火床、竈）のそばに立てて置いている専用の竹筒に梅干しの種を入れ、陸上に持ち帰ってから捨てていた。

年輩者の中には、出漁のために港まで行く間に女性に会うと、再び家に戻って出直す者もいた。不漁になるとカマンが悪いなどといっていた。そのため、出漁時には女性はあまり出歩かなかつた。また、月の1日の最初の訪問者が女性だと、その一月間はマンが悪いともいっていた。従つて、月の1日には女性は出歩かないようにし、また用有つて他の家を訪問しても、家の外で用件を済ますようにしていた。

出漁を忌む日は聞かない。正月は2日から漁を始める。乗り初めは別に行わない。

家族に不幸があった場合は、一般的に初七日の法要が済むまで7日間位は出漁しない。出産があった場合は、漁を休むようなこともないし、自家に寝泊まりすることを忌むようなことも無い。

家族に妊娠がいる場合、漁があることが多かった。漁の多寡によって生まれる子供の性別を占うようなことはない。ニブネ（荷船）が続くといって豊漁が続く時には、乗組員の家族が妊娠しているのではないかなどと話すことがあった。

伝承者Cさん

漁業歴

Cさんは大正末年の生まれ。

漁の手伝いを始めたのは小学校4年生の頃からで、他の家で行っていた壱網漁に参加していた。小学生4人位と年寄り1人と中年1人位が乗り組んで、夜中の2時頃から出漁して網を起こし（引き揚げ）、早朝に港に帰っていた。体力の無い小学生でも手伝うことができるのと、少しでも家計を助けることができ、また漁に慣れるができるので出漁していた。漁があったときには、漁獲物の一部を分けてもらったり、小遣いを少し貰ったりしていた。学校では居眠りばかりして

いた。

小学校高等科を卒業してからは、クラブ（青年クラブ、若者組織）に加入し、一人前の漁師として船に乗り組んで漁を行ってきた。クラブに加入することで、体力が無くとも、物を知らなくとも一人前とみなされた。最初は、父親が船頭を務める自家の鰯網漁の船に乗り組んだ。父親は昔から船主船頭をしており、その鰯網漁のオオブネ（大船、大型船）は奈古で建造したものであった。鰯網は12月頃から4月の春祭り頃までが漁期で、三見沖を漁場に操業していた。6～7人が乗船した大船で、流し刺網を用いてオオバイワシを漁獲していた。パンゲ（日没頃）に網を入れ、トキには（しばらくして）網を引き揚げて、夜9時頃までには帰っていた。大量の鰯がかかった時には、帰港後にメヲヌク（目を抜く、魚を網から外す）作業が夜明までかかることがあった。メヌキはノリシン（乗衆、乗組員）の家族が行っていた。浜に座ってこの作業を行うが、米俵の中に足を入れて寒さを凌いでいた。

鰯網の漁期が終わると、大船はほとんど陸に引き上げられた。そして麦藁で屋根を葺いて、次の鰯網の漁期までは使用されなかった。次の漁期までは、小型の船に乗り換え、小型の定置網である壺網漁を行ったり、一本釣り漁を行ったりしていた。一本釣りでは、ジャンコと呼ばれる撒き餌を入れる籠の付いた漁具で、鰯や鯖を漁獲していた。撒き餌には塩漬の鰯を用い、釣り針に刺す餌にはイカの切り身を用いた。昔は港の沖のごく近い所でも、この漁具を用いて大きい鰯や鯖がたくさん釣れていた。

鰯や鯖の盛漁期は、夏から秋口頃までであった。一本釣りの漁期が終わると、10月頃より次の鰯網漁の準備を行っていた。大量に必要なシュロ繩を用意したり、網を補修したりしていた。網は船具店で購入していたが、シュロはダイ（在）の農家から売りに来ていた物を買って繩になっていた。風呂の残り湯の中に浸けて蒸した物を、浜の石の上で叩いて柔らかくするのが子供達の役目であった。それを家族やカコ（乗組員）が繩になった。網は各自で仕立てて、船頭も乗組員も大体6～7反づつ持ち寄っていた。当時この近辺で鰯網漁を行っていたのは、三見と大島だけであった。

本格的に漁を始めたのが戦時中だったが、最初は油や資材が無いなりに、鰯網や壺網や一本釣り等を行っていた。そのうちに2年間徵用を受け、終戦前には徵兵されて漁を行うことはできなくなった。戦後は下関と三見の手縄網漁の船に数年間乗り組んだが、その後は自家で船を建造して、建網漁などを行って今日に至っている。漁に関しては、自分で工夫したこと多くあるが、手ほどきは父親や年輩者に受けた。

フナダマ信仰

船には必ずフナダマサマという神様を祀っている。新しい船を建造した時に、船大工棟梁が造

船所のなかで祝詞を上げ、港に回航した時に八幡宮の神官が祝詞を上げることで、船に性根のようなものが入ると聞いている。フナダマサマには御神体のような物は無い。フナダマサマにどのような字を宛てるかは分からぬ。

フナダマサマへは豊漁と航海安全を祈願する。

フナダマサマは女の神様と聞いている。また女がお嫌いとも聞いている。従って、昔は船に女性を乗せるようなことはしなかった。

フナダマサマが音などを発して何かをお知らせになるというようなことは聞かない。

フナダマサマへは、毎月1日と15日にゴゼン（御膳）を供える。その日ご飯が炊き上がった時に、他に移す前のご飯を茶碗などに少し取り分けた物と、やはり皿に取り分けた刺身と、開栓したばかりのお神酒を入れたカンドク（小さい徳利）とを、膳に載せて船頭が船に持参する。船に乗ったら、まずお神酒を船の左舷側の海に3回注ぐ。続いて、ご飯を箸で取って3回海へ落とし、刺身も3回海へ落とす。その後で、船のほぼ中央にあたる機関場の表側の上のミトコロ（三所、三ヶ所）にお神酒を注ぎ、ご飯を盛り、刺身をのせる。昔の船では、表のカンパン（甲板）の入り口の上の三所に、お神酒を注ぎご飯や刺身を盛っていた。この時、フナダマサマを拝んだり、唱え言を唱えたりはしない。持ち帰った御膳は船頭がいただく。

まず左舷側の海に供え物を投じるのは、フナダマサマが左舷から船に上って来られて、右舷に下りられるという言い伝えによる。フナダマサマが来られる所に、まず供えるのだと考える。船のつなぎ方は人それぞれで、船に乗る際の作法はない。

1日と15日の他に、かつては大歳神社の祭りの際にも御膳をフナダマサマに供えていた。また鰯網漁が盛んだった頃は、10日毎のサンニョウ（決算、分配を決める）の際や、大漁や不漁の際に乗組員一同で必ず酒を飲んでいたが、その時にもフナダマサマに御膳を供えていた。鰯網漁に限らず、リョウモウシ（漁申し）と呼ぶ豊漁祈願を行う折りにも、必ず御膳を供えていた。

昔はフナタデといって船底を焼いてカキや海藻などを落としていたが、それが終わった時に乗組員一同でお神酒を飲んでいた。漁期が終了して船を陸に引き上げた時にもお神酒を飲んでいた。その際にも、フナダマサマに御膳を供えていたように思う。また、網を揚げて最初にかかった魚を、フナダマサマに供えるということも聞いたことがある。

正月には、フナダマサマのオユワイ（お祝い）と呼ばれる重ね餅をフナダマサマに供える。昆布とスルメと串柿を添えてスダイダイ（橙）をのせた重ね餅を、暮れの30日に船に持参し、機関場か甲板の中に供える。供えたお祝いは15日に下ろし、昔は正月の飾りを焼くドンドン焼きの火であぶり、黒焦げになった物を家の神棚に供えていた。

俗　　信

キレモノ（切れ物、刃物）を海に落とさぬよう注意する。海の神様を傷付けることになるからで、落とした場合は、觀音様（潮音寺）でオコトワリのお経を上げてもらっていた。

梅干しのサネ（種）を海に捨てる時化るといっていた。竹筒などに蓄えておき、帰ってから陸に捨てていた。なぜ時化るのかは分からぬ。

クスを言う（縁起を気にする）者は、御膳を船に持参する時に女性に出会ったら、家に帰って再び出直していた。

漁申し等の豊漁祈願のために、浦のエベス様へ個人的に参詣したことがない。八幡様に豊漁祈願で参詣したことはある。

漁場に着いて初めて網や延縄などの漁具を投入する際にはポーと唱える。また漁具を引き揚げる時にあまり魚が掛かっていないと、ポーとかポーどねえかいと唱える。何に対して唱えるのかは分からぬが、魚が多く掛かる呪いのような言葉だと聞いている。

海士ヶ瀬（豊北町）を通過する際に、初めて船に乗り組んだ者はツンブリコ（前方転回）をさせられた。ツンブリコをしないと船を通してもらえないといふ年輩者から言わされた。他にも、ツンブリコをしないと通過できないとされる所があったと聞いている。

昔は節分の日に家のカドグチ（玄関先）に、魔よけのためにダラの木を切った物を立て置いていたが、船では魔よけというものは聞かない。

船の上での用便は艤からと決まっていた。理由は分からぬが、舷側から用を足そうとして年輩者に艤へ下がれと怒られたことがある。

伝承者Dさん

漁業歴

Dさんは明治末年の生まれ。

小学生の頃から時々は漁を手伝っていたが、漁師として本格的に船に乗り組むのは、小学校高等科を卒業してからであった。最初はメシタキ（飯炊き）として、鰯網漁を行う本家の船に乗り組んだ。この船には父親も乗り組んでいた。

三見沖での鰯網の漁期は、大体12月頃から八幡様の春祭り頃までであった。その後夏の間は、小型の船に乗り換えて、一本釣り漁や延縄漁を行っていた。そしてその合間に、川上村から購入した苧を績んで、盆過ぎ頃から始まるハイオ（羽魚、カジキマグロ）網漁の網などを整えていた。70反の網を用意するのは、大変な作業であった。

本家では羽魚網漁も行っており、最初はこれにも飯炊きとして乗り組んだ。当時は壱岐勝本を基地にして、壱岐対馬の近海で、流し刺網を用いて羽魚を漁獲していた。鰯網漁と同じく7人程度が乗船していた。漁期は11月頃までであった。

当初は船に機械が据え付けられておらず、帆と艤だけ航海していた、壱岐対馬方面へ出漁する大船は、肩の幅が9尺から1丈位で、帆柱も表の間と胴の間に2本立てていた。表の帆をヤホと呼び、胴の間の帆をホンボと呼んだ。帆の大きさはそれぞれ4畳半位と12反であった。対馬から三見に帰る際に、西よりの良い風が吹けば、1昼夜位で直航することができた。

20歳から25歳までは、正月から5月頃まで台湾へ羽魚漁のために出漁していた。台湾では初めは基隆を基地として、後に蘇澳やナンポーを基地として、7～8人が乗船する船で鯖を餌に延縄で羽魚を漁獲していた。当時台湾へは、大分県や宮崎県の漁船が多数出漁していた。両県の船は、ツキンボウ（突棒）と呼ばれるモリで魚を突き捕る方法で羽魚を漁獲していた。三見から台湾まで出漁する場合は、門司から汽船に船や漁具を積み込んで行っていた。帰る時には汽船を利用せず、五島まで3昼夜かけて航海していた。台湾に出漁する頃には機械が導入されていた。

羽魚漁から帰ってからは、夏前頃まで鰯網漁で朝鮮半島近海に出漁していた。北鮮の元山や清津、江原道のサンショウ等を基地にして、7人程度乗り組んだ船で流し刺網を用いてオオバイワシを漁獲していた。石川県の漁船が多数出漁してきていた。

台湾へ出漁しなくなつてからは、冬から春までは、以前のように三見近海で鰯網漁を行っていた。三見近海での漁が終わつてからは、朝鮮半島近海へ鰯網漁で出漁したり、小型の船に乗り換えて、三見近海で一本釣りや延縄等を行つたりしていた。盆過ぎから11月頃までは、以前のように壱岐対馬方面へ羽魚網漁に出ていた。

27～8歳の頃からは、朝鮮半島近海の済州島から巨群島辺りへ出漁し、延縄でクズナ（甘鯛）を漁獲していた。当時朝鮮半島近海へは、越ヶ浜からクズナ網漁を行う船が多数出漁していた。三見からは少なかった。漁期は1年中で、下関を基地に補給や水揚げを行つてた。

戦時中はなかなか漁が難しかつたが、後に下関の手縄網漁の船に乗り組み、戦後は三隅（三隅町）の手縄網漁の船に乗り組んだ。船長は鶴江の者が務めていた。そして年を取つてからは、地元の大敷網漁に参加してきた。



羽魚網漁の優漁旗

フナダマ信仰

フナダマサマは船の性根のようなもので、船に宿っていると考えた。新しい船を建造する際に、船大工の棟梁が、帆柱を立てる所のネキ（傍ら）の船梁に何かを納めていた。何が納められているのかは知らない。棟梁が細工を施することで、船に魂が入ると考えた。昔の船には神棚は無かった。

フナダマサマは女の神様と聞いている。しかし詳しいことは親からも聞いていない。

フナダマサマは、夜間沖で碇を降ろして停泊している時に、チュッチュッチュッチュッと虫が鳴くような音を発せられる。フナダマサマが鳴きよってと言っていたと思う。乗船している者皆に聞こえていた。これによって何かを判断するようなことはない。

毎月1日と15日には、フナダマサマにゴゼン（御膳）を供えるといって、お神酒と炊いたばかりのご飯と刺身とを、船頭が膳にのせて船に持参していた。そして、船大工の棟梁が細工を施した柱を立てる胴の船梁の上のミトコロ（三所、三ヶ所）に、お神酒を注ぎ、刺身とご飯を分けて盛っていた。これでフナダマサマへ御膳を供えることになるのだが、唱え言を唱えるようなことはない。フナダマサマに続いて、竜宮様へも供えるといって、海中にお神酒を注ぎ刺身とご飯を投じた。御膳の残りは、船頭がその場でもしくは家に持ち帰っていた。

船上でご飯を炊いた時には、炊事を行う飯炊きが、羽釜の蓋に最初に取り分けたご飯を、やはり胴の船梁の上に三ヶ所に分けて盛って供えていた。魚を裁いて刺身を作った時にも、同様にしてフナダマサマに最初に供えていた。

伝承者Eさん

漁業歴

Eさんは、大正初年の生まれ。

初めて漁に参加したのは10歳の時で、近所の船に乗り組み壺網漁に出ていた。壺網は定置網の一種で、海の荒れる冬場に網を設置しない他は、年中網代を交替しながら網を設置し操業していた。網起こし（引き揚げ）は夜明前に行なうため、夜中の2時頃出漁して朝6時頃帰港していた。網の引き揚げを手伝った後に学校へ行くのだが、日中は大変に眠かった。

本格的に漁の経験を積むのは、小学校高等科を卒業した数え年15歳からであった。昭和3年に学校を卒業した時には、三見浦では鰯流し刺網漁が盛んに行われており、最初はこの鰯流し刺網漁の船に乗り組んだ。父親がオオブネ（大船）と呼ばれる鰯流し網漁や延縄漁に用いる大型の船の船頭をしていたが、親子で乗船すると一人前にならぬということで、他の家の船にメシタキ

(飯炊き)として乗り組んだ。当時の船には、電気着火5馬力のエンジンが導入されており、7人が乗り組んでいた。三見浦での鰯の漁期は、4月の八幡様の春祭り頃までで、それ以降は北鮮へ出漁し操業した。三見からは6～7隻出漁していた。北鮮では6月頃まで操業した。水揚げした鰯は彼地で萩市松本の吉村ゼンコウ氏が問屋として引き受け、魚油やシメカスを製造していた。北鮮への出漁は昭和10年頃まで続いた。

鰯網漁の漁期が終了すると、大船は陸に引き上げて次の漁に備えた。藁で屋根を葺いて雨と直射を防いでいた。夏の間は、小船で延縄を延べたり鰯や鰆の一本釣りを行ったりした。

昭和10年過ぎまで続いたカジキ網漁の船にも乗り組んだ。カジキ網漁は、2～300斤もあるカジキ(マグロの一種、バレンとか羽魚ともいう)を流し刺網で漁獲する勇壮な漁で、三見では昔から盛んに行われていた。やはり7人が乗船して操業するのだが、これにも最初は飯炊きとして乗り組んだ。9月頃に出漁し、壱岐勝本を根拠地にして壱岐対馬近海で操業し、旧暦11月の大歳祭り頃まで帰っていた。

12月頃からは鰯網漁が始まるが、鰯網漁がふるわなくなった頃には、一部の者が正月の前後にフクナワ(フク縄、フク延縄)漁を行っていた。大船を造り替え、焼き玉エンジンを搭載した小型の船で、山口島根県境沖で操業していた。しかし、フクが贅沢品とみなされ、その漁のための燃料油が配給されなくなってしまったため、自然と漁が中止された。

戦争が始まると、燃料や資材が不足し乗組員も確保できなくなったため、遠方への出漁や大掛かりな漁が次第に行われなくなった。そのうちに、漁船が徴用されるようになり、また人も招集されたり徴用されたりするようになり、小規模な漁も満足に行われなくなった。自身も徴用を受け、後に招集されて大陸で敗戦となり、昭和24年6月によくやく三見に帰還した。三見に帰ってから後は、個人で船を持って様々な漁を行ってきた。

フナダマ信仰

フナダマサマは、船と乗組員を守って下さる神様と考える。父親もそう言っていた。主に航海安全を祈願していた。船大工棟梁が、新しい船を造って進水させる際に、フナダマサマの魂のような物を船に込める。神棚は別に設けない。昔の船は、ドウノマ(胴の間)の船梁のマエブネ(前船、左舷側)の方に、穴を穿ってあり何か埋めてあった。フナダマサマは、その胴の船梁のやや前船の所におられると考えた。フナダマサマへの供え物も、そこに対して行っていた。機械船となり、ブリッジを設けるようになってからは、ブリッジの上に物を供えていた。船に祀るこの神様をフナダマサマと呼ぶが、どのような字を宛てるのかは分からない。

フナダマサマは女の神様と聞いている。従って、昔は女性を船に乗せることはなかった。フナダマサマがリンキを焼いて(嫉妬して)良いことがないとされた。

船上で口笛を吹いてはならないとされる。楽器などの鳴り物を鳴らすことも忌まれる。フナダマサマは、口笛や鳴り物の音を嫌われると聞いている。なぜ嫌われるのかは分からぬ。

フナダマサマは、チリチリン、チリチリンと聞こえるような音を発せられる。これをフナダマサマのオイサミと呼んでいた。夜間に停泊している時や、静かに艤を押している時に聞こえることが多かった。一般的に日和が変わる時にオイサミが聞こえていた。オイサミは船に乗り合わせている者総てに聞こえた。聞こえてくる場所は定まっておらず、船のあちこちから聞こえていた。機械が導入されてから、オイサミは聞かれなくなった。

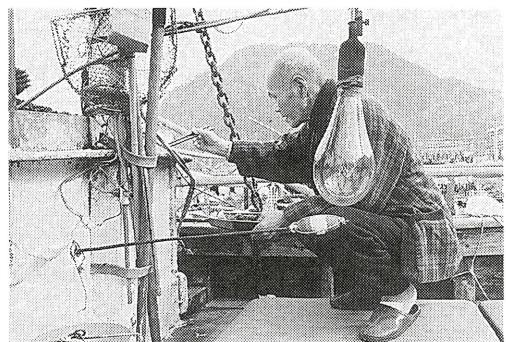
フナダマサマへは、毎月1日と15日にゴゼン（御膳）を供えていた。お神酒と炊いたばかりのご飯と魚（刺身）をそれぞれ器に入れて膳に載せた物を御膳と呼び、船頭がそれを船に持参し、フナダマサマのおられるとする胴の船梁に供えた。丁寧な船頭は今でも1日15日には欠かさず供えている。昔は胴の船梁の真中よりやや前船側の上に、ご飯と刺身を三ヶ所に分けて盛り、それにお神酒を注いでいた。最近は、機関場の表側の上に同様にご飯と刺身を盛り、お神酒を注いでいる。フナダマサマに供えた後に、竜宮様に供えるといって海中にご飯と刺身を投じ、お神酒を注ぐ。

正月三ヶ日の間もフナダマサマに御膳を供えるが、通常の御膳のご飯が煮た黒豆に代わる。

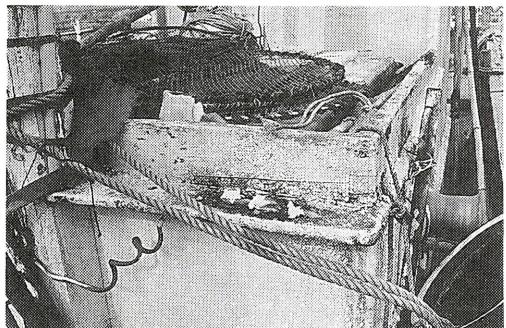
船上でご飯を炊いた時には、その都度最初に釜の蓋にご飯を少し取り分けて、それを箸で船梁の上の三所に分けて盛っていた。これは炊事を行う年少の飯炊きの役であった。フナダマサマへの供え物を怠ると、フナダマサマも腹が減っていざという時に助けてもらえないとい、父親から常々言い聞かされていた。

正月11日には、大船を所有する者の家では、アミイワイ（網祝い）という行事が行われた。この日船頭と乗組員は、船頭の家の床の間に供えてあったフナダマサマのオイワイ（祝い餅）とお神酒を持って船に乗り、フナダマサマと網に供えて豊漁と安全を祈願していた。そして一同でお神酒をいただいた後に、船頭の家などで宴会を催していた。

船頭によっては、初めての漁で捕れた魚を御膳にしてフナダマサマに供えていた。他にフナダマサマを祀る機会については聞かない。



フナダマ様へ御膳を供える



機関場の上に供えられたご飯と刺身

俗　　信

海に切れ物（刃物）を落とすことが忌まれた。柄の付いた刃物は刃先が下になって海底に刺さるため、竜宮様の頭に刃物を突きたてることになると言っていた。刃物を海に落とした時には、潮音寺に参ってオコトワリ（お断り、お詫び）のお経を上げてもらっていた。

梅干しのサネ（種）を海に捨ててはならないとされた。海が荒れると言っていた。年輩者から、梅干しの種を捨てる所の船は良く難破すると聞かされた。船上で梅干しを食べた時には、籠の傍らに用意した竹筒に種を入れ、陸に上がってから捨てていた。

岬のハナ（突端）にオキガカリ（沖がかり、停泊）するものではないとされた。岬の近辺は難所であり、様々な靈が集まっていると言っていた。様々な靈の中には災いを為す靈もいて、難船させて仲間を増やそうとするから近付かないほうが良いと考えた。

アヤカシなどに遭った時には、魔よけに船に乗せている御札を流すことがあったと聞いている。新潟の船が進路を失い、灯火に導かれるままに船を走らせたら、港の口に着いたということを聞いたことがある。その港には灯火を灯す所は無かったので、アヤカシに遭ったのだろうされた。後に聞いたところでは、その新潟の船は仏を拾っていたということで、仏が港に帰りたくてアヤカシに遭わせたのだろうと言われた。

船の上で、大根をスルといってはならないという。スルというのは魚を逃がすということで、大根をオロスと言い換えた。

伝承者Fさん

漁業歴

Fさんは明治末年の生まれ。

初めて一人前の漁師として出漁したのは、小学校高等科を卒業した数え年16才の時だった。当時、伯父が羽魚網漁や鰯網漁を行う大船の船頭を務めており、その船にメシタキ（飯炊き）として乗り組んだ。

明治時代までの三見は、近隣ではナワフネドコロ（縄船所、延縄漁の船が多い所、延縄漁が盛んな所）と呼ばれており、壱岐対馬から朝鮮半島近海にかけて多くの大船が出漁していた。今に較べると大変に貧弱な装備で遠方に出漁していたため、漁の効率も悪く、遭難も少なくなかった。そのため延縄漁を行う者は次第に少なくなり、代わって羽魚網漁や鰯網漁が盛んになっていった。

羽魚網漁では、6～7人が乗船した大船で壱岐対馬近海まで出漁し、流し刺網を用いて羽魚（カジキとかバレンともいう）を漁獲していた。網は麻糸を自ら績んで仕立てていた。1反の網

の網丈が5～6尋、幅が25間程度、網目の大きさが1尺もある大きな網を、5～60反つないで海面近くを流していた。盆過ぎから11月頃までが漁期で、対馬の南東側の海を漁場に、夜間に操業し300斤を超す羽魚を漁獲することができた。捕れた魚の水揚げと食糧や燃料の補給は、主に壱岐勝本の問屋を通じて行っていた。風向きによっては、対馬の厳原に入港していた。電気着火の機械の導入は、羽魚網漁に出始めて3年後位のことであった。

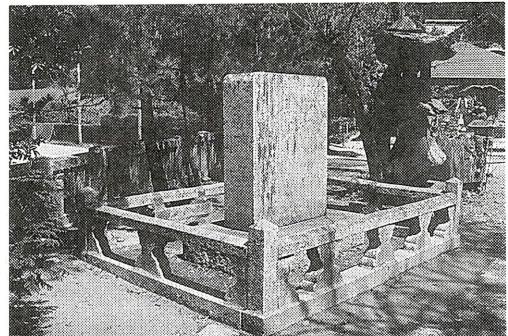
船中での炊事を担当する飯炊きは、最も経験の浅い若い者が務めていた。炊事をしながら漁を覚えていった。操業中は、若い者は船の表の方で作業をすることが多かった。年輩者は船の艤での作業を受け持った。風波がある時に艤で艤を押して大船を操るようなことは、経験を積んだ年輩者でないとできなかった。

乗組員をフナカタ（船方）とも呼ぶが、出漁前に船頭と船方とで相談し、船頭の家で御馳走になることで乗り組みが決まっていた。一漁期ごとに相談して乗り組みを決めるのが原則だが、一般的には5年位は同じ船頭の船に乗り組んだ。

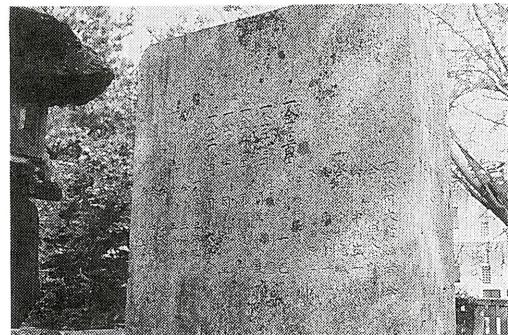
鰯網漁の漁期は、三見沖が12月頃から4月末頃までであった。昭和の初年頃には、5月から6月にかけて、朝鮮半島近海でも操業していた。ホウギヨシンでシメカス（搾滓）を製造していたので、そこに捕れた鰯を水揚げしていた。三見からも多数出漁していたが、戦前に石川県から入漁してくるようになり、数年で漁獲が激減してしまった。

利益の分配をサンニョウ（算用）という。鰯網漁の場合は、網分として利益の4割を割り当てるのに対して、人件費等その他に利益の6割を割り当てて分配を計算していた。例えば網が20反有れば、水揚げ高から諸経費を差し引いた額の4割を、反数の20で割って網1反分の分け前を決めた。一人が3反持ち寄っていれば、3反分の分配が有った。また残りの6割については、船頭がフナマエ（船前）と本人の分で4人前程度、船方は一人一人前として分け前を決めた。つまり船方への分配は、網と人に対しての分け前を足したものとなる。鰯網漁の場合は、この算用を10日ごとに行っていた。羽魚網漁の場合は、漁期が終わってから算用を行っていた。

羽魚網漁や鰯網漁は、大体戦前までに衰退してしまった。戦時中は、漁に携わることができる



八幡宮境内の羽魚漁記念碑



碑に刻まれた壱岐対馬の問屋名

人も少なくなり、物資等も不足していたため、地先で小規模に様々な漁を行っていた。戦後すぐに2.5トン位の小型の船に家族3人で乗船し、10反程度の網で鰯網漁を再開したが、これも数年で不漁となってしまった。その後は、大敷網漁や壺網漁や建網漁を行ってきた。現在も壺網漁は続いている。

フナダマ信仰

船に祀る神様をフナダマサマと呼ぶ。どのような字を宛てるかのは分からぬ。

フナダマサマは船の性根のような物であり、船と漁師を守って下さる神様だと考える。昔、船を大層大切に使い、フナダマサマを深く信仰していた者がいた。その者が朝鮮に夏橙を売りに行った際に難船して水船になり流されたが、通りがかった他所の船に救助され、人も船も無事に帰ってきて来たことがある。フナダマサマが助けて下さったに違いないと皆が言っていた。日頃から厚くフナダマサマを信仰する者は、フナダマサマの加護がある。

シンゾウブネ（新造船）を港に回航した時には、八幡様の神官にお祓いをしてもらい、航海安全や豊漁をご祈念してもらう。それとは別に、造船所で進水する前に、船大工棟梁がフナダマサマの性根のような物を船に入れる。何を入れるのかは分からぬ。

フナダマサマは女の神様と聞いている。フナダマサマがリンキを起こされる（嫉妬される）から、船に女を乗せてはならないという。

フナダマサマは、船上で夜寝ているような時に、虫の鳴くような音を発せられるということを聞いたことがある。その音が聞こえる船頭と聞こえない船頭とがあったらしい。自分自身は経験が無いので、その音が何なのかは良く分からぬ。

フナダマサマへは、毎月1日と15日とにゴゼン（御膳）を供える。炊いたばかりのご飯と刺身とお神酒を膳にのせて船に持参し、フナダマサマへ供えるといって、船の機関場の上に三所に分けて少しづつ盛ってお神酒を注ぐ。昔の機械が導入される前の船の場合は、胴の船梁の上の中央より少しマエブネ（前船、左舷）側の所に、三所に分けて盛りお神酒を注いでいた。船によっては、表の甲板の入り口の上に供えていた。フナダマサマに供えた後に、水神様に供えるといって前船の舷から海中に供え物を投じる。前船側で供える理由はよく分からぬ。

月の1日と15日以外には、何かの漁を開始して初めて捕れた魚をフナダマサマに供えることがある。フナダマサマに漁獲を感謝して、豊漁を祈願する。これは人それぞれだが、自分自身は壺網漁を開始してはじめて捕れた魚を、御膳にしてフナダマサマに供える。八十八夜はアゴの誕生日といわれ、飛魚が沿岸に寄って来る。壺網に限らず大敷網やアゴ網（流し刺網）等の漁で、その年初めて飛魚が捕れた時には、黒焼きにして（黒く焦がして）フナダマサマに供える。なぜ黒く焦がした魚を供えるのかは分からぬが、昔からこれは行っていた。アゴ以外にも、初めて捕

れた魚を黒焼きにしてフナダマサマに供える者がいた。またフナダマサマにだけでなく、竜宮様や明神様の沖を通る際にも、捕れた魚を海に投じて供えていた。

俗　　信

船上で口笛を吹いてはならない。理由は分からぬ。

梅干しの種を海に捨ててはならない。持ち帰って陸上に捨てていた。理由は分からぬ。

船に設けた竈の灰も、海に捨てるようなことは無かった。陸上で粗末にならぬ所に捨てていたように思ふ。

初めて船に乗り組んだ者は、珍しい物に出会った時にはツンブリコ（前方転回）させられていた。ツンブリコをしないと通してもらえないといつ輩者がいっていた。海士ヶ瀬や岬の沖などの難所を通る時にも、ツンブリコをしていた。やはり通してもらえないと言われたが、そういった難所には神様が祀られていることが多く、新参物はツンブリコをすることで参拝することになるのだろうと思う。

船での用便是艤で行っていた。最近のようにヨコシ（船体横、舷）から用を足すと、年輩者に怒られていた。

伝承者Gさん

漁業歴

Gさんは大正初年の生まれ。

小学校高等科を卒業した数え年16歳で、父親が船頭を務めるナワフネ（縄船、延縄漁の船）に乗り組んだ。川尻岬から見島辺りを漁場として操業していた。三見は縄船所といわれ、父親も延縄漁で年中壱岐対馬方面へ出漁していたが、小学校を卒業した昭和の初年頃には鰯刺網漁が盛んになっていた。従って、延縄漁だけでなく、正月前から春祭り頃までは同じ船で鰯網漁を行っていた。鰯が多く漁獲される頃には、その水揚げで一年を渡世することもあった。北支事変の頃には、再び延縄漁で対馬から五島の方へ出漁するようになった。

30歳前には船頭となり、7～8人が乗船した焼玉エンジンを据え付けた船で東シナ海に出漁し、延縄で甘鯛やフカを漁獲していた。五島の荒川で餌や油を補給し、釣れた魚は長崎や博多や下関に水揚げしていた。釜山に水揚げすることもあった。大体1週間から10日間位で、五島まで進出して操業水揚げし、再び三見に帰港していた。

終戦後もすぐに延縄漁は再開し、肝油を絞るフカを捕るために東シナ海に出漁していた。昭和

40年代に大和堆までイカ漁に出るようになるまでは、甘鯛やフクを漁獲する延縄漁で東シナ海に出漁していた。

フナダマ信仰

フナダマサマは船と乗組員を守って下さる神様で、新しい船を進水させる前に、船大工棟梁が造船所のなかで性根を入れていた。常日ごろから船の手入れを怠らないで、フナダマサマへの供え物でも欠かさず供えるような者は、難船してもフナダマサマが助けて下さるという。実際にそのような信心厚い人が、遭難したが助かったことがあった。

フナダマサマは女の神様と聞いている。その関係からか昔は女を船に乗せなかった。女が乗ると良くないといっていた。

フナダマサマは蛇がお嫌いと聞いている。船の上で蛇の話をするようなことも無かったが、詳しいことは分からぬ。四つ足もお嫌いとのことで、漁師は四つ足の肉を食べなかつたし、沖に持つて出るようなことはなかつた。

フナダマサマには、毎月1日と15日にゴゼン（御膳）を供える。船頭はご飯と刺身とお神酒を膳にのせて船に持参し、船中央の胴の船梁に供え、船と乗組員の安全と豊漁をフナダマサマに祈願する。船上でご飯を炊いた時には、メシタキ（飯炊き）が、羽釜の蓋に少量取り分けて盛つて供えていた。豊漁の時にも、フナダマサマのお陰といって臨時に御膳を供えることがある。供える場所は、最近の大船では操舵室の神棚になっている。祈願する際に、唱え言を唱えるようなことはない。

正月元旦には、フナダマサマのオイワイ（お祝い）と呼ぶ重ね餅を、船に持参しフナダマサマに供える。重ね餅の上には昆布とスルメと橙をのせる。三ヶ日供えておいたら下げる。

俗　　信

昔は刃物を海中に落とすことを嫌っていた。落とした場合は、潮音寺でお断りのお経をあげてもらっていた。

船上で口笛を吹いてはならないといわれていた。何気なく吹くことがあるが、キッソウが悪い（縁起が悪い）と年輩者から叱られていた。

漁に出る前に限らず、その日最初に坊主に会うと良くないといっていた。

酢は魚を逃がすという意味のスルという言葉に通じるので、沖に持つて出ることはなかつた。縁起が悪いともいっていた。

梅干しのサネ（実、種）を海に捨ててはならないといっていた。天神様を流すことになり、菅原道真公に対して申し訳ないからと聞いている。

汁かけ飯を食べるものではないと聞いている。理由は良く分からぬ。

出漁前に八幡様で豊漁祈願を行っていた。船頭と乗組員一同でお神酒と魚を持って参詣し、神官に豊漁を御祈念してもらった後にお神酒といいただき、御札を受けて帰ってくる。網を投入する際にこの御札を結びつけることもあった。漁の節目には、津和野のお稻荷様に豊漁祈願で参詣することもあった。

出漁には日柄の良い日を選んだ。三隣亡や金曜日の出漁を嫌った。出漁予定の日の日柄が良くない時には、それ以前の日柄の良い日に仮に出初めていた。

伝承者Hさん

漁業歴

Hさんは明治の末年生まれ。

初めて出漁したのは小学校4年生の頃で、壺網漁やワカナ網漁の手伝いをしていた。壺網漁は他家の船にノリコ（乗組員）として乗り組んだ。朝のセリイチ（競り市）に間に合うように夜中に出漁し、早朝帰港して学校へ行っていた。日当として魚と小遣い程度の金銭を貰っていた。

またワカナ網漁の場合は、魚が回游してくると学校まで知らせがあり、急いで帰宅して自家の網を持って船に乗り組んでいた。子供でも一人につき1反ずつ網を積み込むことができた。そのため簡単な手伝い程度しかできなくても、一人前の分け前があった。

小学校高等科を卒業してからは、ナガノウ（延縄）漁を行う自家の船に、家族や親戚と共に乗り組んだ。ジナワ（地縄）と呼ばれる近海での延縄で、川尻岬から見島辺りまでを漁場に、通年操業していた。

分家して独立してからは、船を建造して、対馬ヘオニイカを釣りに行っていた。戦後は建網漁を中心に漁を行ってきた。昭和25年朝鮮動乱が始まった頃に、三見から北々東に機械船で7時間程度航走した所にあるセンリという瀬で、ミエアミ（三重網）を用いてダルマと呼ぶ魚を大量に漁獲した。近海での漁がふるわなくなり始めていた頃で、センリでのダルマの大漁は、漁船の大型化と高速化のきっかけとなった。

フナダマ信仰

船に祀る神様をフナダマサマとかフナダマ明神と呼ぶ。

フナダマサマは女の神様で、そのため船に女を乗せてはならないという。船の上に船（女性の意）を乗せてはならないともいう。メンツクロ（女）同志で相性が良くないとされる。

フナダマサマが音を発して何かを知らせて下さるようなことは聞かない。

フナダマサマには、毎月1日と15日に、ゴゼン（御膳）と呼ぶお神酒と魚の刺身とご飯をのせた膳を供える。船頭が御膳を船に持参し、胴の船梁の中央辺りの上の三所にお神酒を注ぎ、同じ所に箸で刺身を数切れずつのせ、更にご飯をのせてから、フナダマサマに大漁を中心祈願する。続いて竜宮様と明神様に供えるといって、右舷から海へお神酒を注ぎ、刺身とご飯を落とす。右舷で供えるのは、日ごろ右舷で様々な漁の作業を行うからと考える。

船上でご飯を炊いた時にも、フナダマサマと竜宮様と明神様とには、オハチ（御初）を供えていた。まず、御膳を供えるのと同じ三所にシャモジでご飯を少し取り分けて盛り、続いて二掬い海へも投じていた。

豊漁の時にも、フナダマサマへ捕れた魚を刺身にして供える者がいた。不漁の時にフナダマサマへ特別に祈願するようなことはない。

フナダマサマの御神体は、玉江（萩市）の造船所で船を建造した折りに見たことがある。船大工棟梁が、ブリッジの中の桁に穴を穿ち、スルメと昆布と5円硬貨を納めて埋め木をしていたように思う。詳しくは分からぬ。

俗　　信

海に刃物を落としてはならない。海の身を切るといって嫌う。落とした場合は、潮音寺に参つてお経を上げてもらいオコトワリ（御断り）をする。

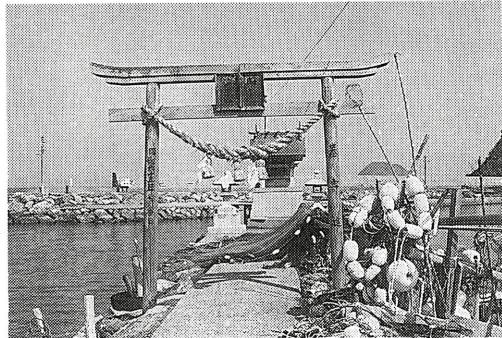
船に酢は積み込まなかった。三見では餌を取られることをスラレルといい、財産を失うことをスルともいう。また何も無いとか外れるということをスカという。酢はこのスルとかスカに通じるので良くないと聞いている。

梅干しは持って出ていたが、種を海に捨ててはならないとされた。理由は分からぬ。

伝承者 I さん

漁業歴

Iさんは大正初年の生まれ。



龍宮様と明神様を併せ祀った社

小学校高等科を卒業して、最初は羽魚網漁と鰯網漁とに携わる。

フナダマ信仰

船に祀る神様をフナダマサマと呼ぶ。どのような字を宛てるのかは分からぬ。

フナダマサマは女の神様と聞いている。女同志では折り合いが悪いとか、フナダマサマがリンキを焼かれるといって、昔は船に女を乗せることを嫌っていた。海の神様である宗像の神様も女神様と聞いている。

フナダマサマは、海上においてチリンチリンと鈴虫が鳴くような声を発せられる。それをフナダマサマのオイサミと呼ぶ。場所や昼夜の関係なく、操業中でも停泊中でも、船の内外どこからともなく聞こえてくる。船上の皆に聞こえる。大体、時化る前にオイサミがあると聞いている。

フナダマサマには、毎月1日と15日と28日にゴゼン（御膳）を供える。炊いたばかりのご飯と魚（刺身）とお神酒を膳載せ、それを船頭が船に持参し、昔は船の真ん中の胴の船梁の前に供えてフナダマサマを拝していた。船から持ち帰った御膳は、オサガリ（お下がり）といって船頭が食べていた。船によっては表の甲板の前や、ブリッジの上に御膳を供える。

旧暦の正月11日には、船頭とカコ（乗組員）とが船に乗り、フナダマサマを拝した後に一同で持参したお神酒と肴をいただき、また船頭が持参した節分の豆を撒いていた。これをフナマツリと呼ぶ。豆を撒くのは船も家と同じと考えるからで、「福は内、鬼は外」と唱えて船上から船の外に豆を撒く。正月に漁をし初めるようなことはない。

船上でご飯を炊いた時には、最初に羽釜の蓋に三盛ほど少量を取り分けてフナダマサマに供える。これは飯炊きが、ご飯を炊いた度ごとに行う。また、操業していく初めて捕れた魚もフナダマサマに供えていた。

フナダマサマの御神体は、船大工棟梁が木のコケラ（小片）で作り、進水直前に胴の船梁に納めていた。何を納めるのかは知らないが、人形などが入っていたのを見たことがある。10トン位の大船でないと御神体を納めなかったように思う。小さい船は神社で受けてきた御札を貼りフナダマサマとしていた。フナダマサマの御神体は、廃船時もそのままにしておいた。入れ換えるようなことはない。

俗　　信

船大工が道具箱を返すと、造った船が転覆すると聞いている。従って船大工は、道具箱の中に入った木屑などを取り除くような時にも、道具箱を傾けることはあっても返すことは無かった。

船を売却するような時には、船上で「売る」などといってはならない。マン（漁運）が悪くなる。また、古い船を購入するような時には漁運の良い船を選ぶ。古い家を購入する時には、没落

した家を購入するのが良いと聞いている。

父親から聞いた話では、トシノヨ（2月3日節分の夜）に大豆を煎ったものを撒くが、撒く前に神棚に供えたものを、昔は少し紙に包んで船の甲板の中に納めておいた。沖でガス（霧）がかかって困ったような時には、この豆を撒くと不思議とガスが晴れていたという。

初めて船に乗り組んだカシキ（飯炊き）は、岬や瀬戸を通過する際にツンブリコ（前方転回）をさせられた。ツンブリコをせぬと、船がその場所を通過することができないといわれた。この近辺では、川尻岬沖や海士ヶ瀬でツンブリコをしていた。

遠方への出漁は、大安、友引、赤口などの日を選ぶ。

伝承者 Jさん

漁業歴

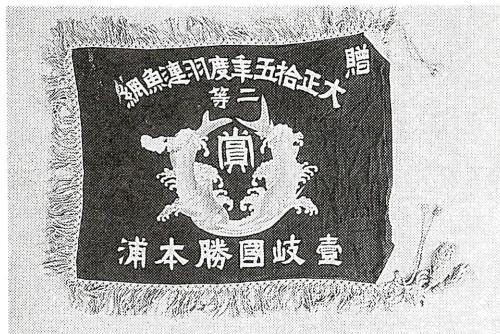
Jさんは、大正中頃の生まれ。

本格的に漁に出るようになったのは青年学校を修了してからで、数え年17歳の時であった。まず、5月末ころまで三見沖で操業する鰯網漁の船に、続いて盆過ぎから11月頃まで壱岐対馬方面で操業する羽魚網漁の船に、それぞれメシタキ（飯炊き）として乗り組んだ。共に他家の船で、飯炊きとして乗り組んでいる間に、漁や船や海に関する知識を見聞きして得た。これらの船への乗り組みは、昭和14年の末に兵役に就くまで続けた。

当時の三見の漁船には、既に機械が導入されていた。昭和2～3年頃に、北九州方面で若松モーターとかモリヤの機械を購入し、それまで使用していた船を改造して設置したのが最初だと聞いている。当時の羽魚漁や鰯網漁に用いる船は、肩の幅が9～10尺で、ヤホとホンボ（本帆）を揚げる2本の帆柱が立てられるようになっていた。機械導入の後も、4～5丁の艤は載せていた。

機械導入の後も、4～5丁の艤は載せていた。当時の機械は今ほど馬力も無く、信頼性も無かった。従って、機械は導入されているが帆も併せて使用していた。壱岐対馬などの遠方に出漁する時には、機械が止まてもすぐに対応できるように、ヤホ柱と呼ばれる船首部分の帆柱は常に立てていた。機械と帆や艤を併せて使用していたため、機械導入以前と以後の、両方の技術を身につけることができた。

敗戦後に復員したのは昭和21年で、しばらくは体調を崩して出漁できなかった。昭和22年から



羽魚網漁の優漁旗

下関の手縄網漁の船に乗り組み、その後兄弟でイッパイビキ（一杯曳き）の手縄網漁を始めた。漁具や技術は島根県から導入した。大田市の近くの久手、波根、五十猛等が手縄網漁の先進地であった。その当時は北浦沖での手縄網漁が盛んで、三見にも二杯曳きの手縄網漁を行う者がいた。また、下関や仙崎の手縄網漁の船に、三見から乗組員として乗船する者も多かった。

フナダマ信仰

船に祀る神様をフナガミサマという。

フナガミサマは女の神様と聞いている。フナガミサマがリンキを焼かれる（嫉妬される）から、女が船に乗ってはいけないと言っていた。フナガミサマがお怒りになると、船を守っていただけないからではないかと考える。壱岐対馬方面へ出漁する際に途中で参詣していた宮地様（福岡県宮地嶽神社）も、女の神様と聞いている。

フナガミサマへは航海安全を祈願していた。フナガミサマに姿や形は無く、御神体も別に無い。船大工の棟梁が、造った船を進水させる前に、造船所の小屋の中で一人船に乗ってフナガミサマを船に納めていた。帆柱を立てる胴の船梁に何か細工をして納めるようで、フナガミサマはそこに居ますと考えていた。従って、供え物も胴の船梁に供えていたし、祈願するのも胴の船梁の細工をされた場所に対してであった。

フナガミサマへは、毎月1日と15日の早朝にゴゼン（御膳）を供えていた。炊いたばかりのご飯と刺身とお神酒を器に入れて盆膳に載せた物を御膳という。船頭がこれを船に持参し、まず胴の船梁の中ほど三ヶ所にお神酒を注ぎ、続いて同じ所に刺身とご飯を分けて盛り、フナガミサマへ祈願することで、フナガミサマへ御膳を供えるとしていた。また同時に竜宮様へも供えるといって、マエブネ（前船、左舷）から海中へお神酒を注ぎ、刺身とご飯を落としていた。

正月三ヶ日の間もフナガミサマへ御膳を供えた。ご飯と刺身とお神酒に、黒豆を炊いた物を添えていた。

船上でご飯を炊いた時や刺身を作った時にも、必ず最初にフナガミサマへ取り分けた物を供えていた。ご飯はまず羽釜の蓋に取り分け、それを胴の船梁の中ほど三ヶ所に分けて盛る。船上でフナガミサマへ物を供えるのは、飯炊きの役目であった。

漁が始まって初めて獲れた魚をフナガミサマに供えるということもあった。ハイオ（羽魚）網漁の船に乗り組んでいた時に、羽魚の初物のオサヅキと呼ばれるエラの近くの部分を、湯がいでフナガミサマに供えるということを経験した。ワタと呼ばれる魚の内臓を、やはり湯がいで供えることもあった。いずれも乗組員が食用にする前に供えるのだが、初物なので特にフナガミサマに豊漁を感謝し次の漁を祈願する意味で供えていた。竜宮様にも併せて供えていた。鰯網漁や壷網漁では、最初に漁獲された魚を刺身にしてフナガミサマに供えていた。また大敷網漁では、そ

の年初めて獲れたアゴ（飛魚）を黒焼きにしてフナガミサマに供えていた。これら初物をフナガミサマに供えるのは、やはり豊漁を祈願したことであった。

フナガミサマは酢がお嫌いと聞いている。従ってフナガミサマへ供える御膳の中の刺身へは、スイチ（酢醤油）をかけない。船に酢を積み込むこともなかった。なぜ酢がお嫌いなのかは分からぬ。

船の上で口笛を吹くとオオクジをクラレていた（大層叱られていた）。時化るからとか、フナガミサマがお嫌いだからと聞いている。また、楽器などの鳴り物を鳴らすことも忌まれていた。ハーモニカが好きで上手な先輩の乗組員がいたが、絶対に船の上ではハーモニカを吹かなかつた。フナガミサマが、鳴り物の音を嫌われるからと聞いている。

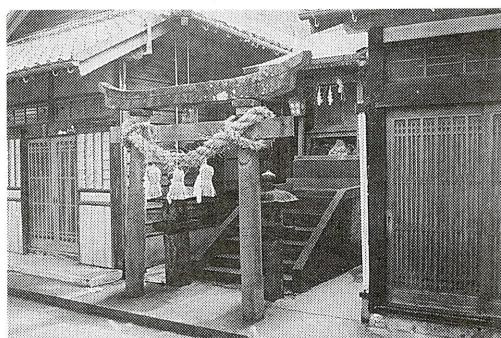
フナガミサマが音を発して何かを知らされるということは聞いたことがあるようだ。実際に経験したことではない。

俗　　信

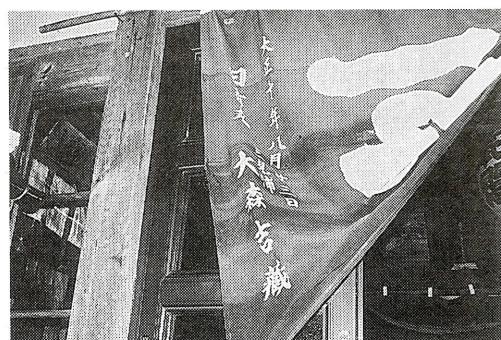
フナガミサマへの供え物の箇所で触れたが、海の神の竜宮様へも獲れた魚の初物を供えていた。鰯網漁等の漁の帰りに港の東北にあるリュウグウゼ（竜宮瀬）の沖を通過する際に、捕れた魚の一匹を瀬に向かって投じていた。また、大敷網漁の漁獲物を萩に船で運ぶ際にも、竜宮瀬の沖で瀬に向かって魚を投じていた。その日漁獲があつたことを感謝し、次の豊漁を祈願するために此を行う。

浦のエビス様に豊漁祈願をすることはあまり無かった。日ごろも、一部の者を除き参拝する者は少なかった。ただエビス様の祭りの日には、神輿を船に乗せて大敷網の網代回りが行われ、八幡宮神官により各々の網代で豊漁祈願が行われた。この際若い者が、魚が大敷網に入るように、大敷網の口からダイと呼ばれる奥の袋状になっている部分まで泳いでいた。

出漁前や漁の期間中に行う豊漁祈願を漁申しと呼ぶが、一般的には三見八幡宮に乗組員一同で参拝し、お神樂を上げてもらいお神酒をいただいて豊漁の祈願をしていた。羽魚網漁や鰯網漁が盛んだった頃は、萩市松本の人丸神社に参



エビス様の社



人丸神社の奉納幕

詣して漁申しをすることが多かった。そのため、人丸神社には三見浦から奉納された提灯や幕が今でも掲げられている。漁申しで神社に参詣する際には、カケノイオと呼ぶ魚二匹を腹合わせにした物を持参した。

水死人をナガレボトケ（流れ仏）という。流れ仏を見つけたら、必ず船に引き上げて港に連れ帰っていた。流れ仏を敬遠し、帰りに拾い上げると言って出漁し帰路を変えて、不思議と帰る途中に待っているものと聞いている。拾い上げずに逃げると自分に災難が有るとも言われていたので、必ず拾い上げていた。男は伏せて、女は仰向けで漂っている。亡くなって3日目と7日目に浮き、それ以後は当分浮かないとされる。

流れ仏を引き上げる際には、「軽うなってくれよ」と言うと軽くなる。また、流れ仏の身内の者が引き上げると、仏が鼻血を出すと聞いている。その他に誰が引き上げるとか、問答をするといった引き上げる際の作法のようなものは無い。ウシロブネ（後ろ船、右舷）から引き上げて、艤の間に安置し、港に帰ったら船を横づけしウシロブネから下ろしていたように思う。普通は漁協に届け出るので、漁協で身元確認や埋葬や供養を行っていた。拾い上げた本人も供養は行っていた。流れ仏を拾いあげてしばらくは、仏が連れて帰ってくれた礼をするのか不思議と豊漁になった。

身内に不幸が有った場合は、一般的には7日間は出漁しなかった。身内に子供が誕生した場合も、数日間出漁しなかった。大船に乗り組んでいる際に不幸があった場合は、近海で操業しているような時には、関係する本人を除いて漁を行っていたと思う。また、遠方へ出漁するような大船に乗り組んでいる場合は、出漁を延期していたと思う。不幸の場合は忌みがかかるといえるために、神事等にもしばらくは拘わらない。忌みのかかる自家を避けて、他の家に寝泊まりして出漁するようなことは聞かない。

乗組員の家族に妊婦がいると、豊漁になることが多かった。特に船頭の家族に妊婦がいる場合に、その船は良い漁をするとも言っていた。男の子が生まれる場合に豊漁になるとも聞いている。また子供が生まれるまで豊漁が続いているとも、生まれてしまうと不思議と通常の漁果になっていた。

前述したように、船に酢を積み込まないので船上で酢の物は食べないが、梅干しは食べていた。ただし、梅干しの種は海に捨ててはならないことになっており、竈の傍らに用意した竹筒に入れて持ち帰っていた。梅干しの種を捨てる時化るとされた。

漁種が変わりその年初めて出漁する時には、日柄の良い日を選んでいた。正月には、出漁はないが日柄の良い日を選んで船に乗り初めるということもしていた。正月7日はナノカビといい、出漁を忌む者が多かった。かつて乗船していた手縄網漁の船などは、13日とか金曜日には出漁しなかった。他に出漁を忌む日は聞かない。

出漁に際し、家を出て港に向かう間に女性に会うと、再び出直すという者がかつては多くいた。八幡様に参詣する際に、最初に女性に会ったら出直すという者も多かった。

昔の大船は、艤に帆柱を立て掛けて置くトライと呼ぶ鳥居状の木枠が設けてあった。船に乗り込む際には、このトライの下をくぐっていた。トライより表側の船の中は、神社でいえば境内のようなものと考えており、船上での用便はトライより艤の方で行っていた。トライより表側で小用を足したりすると、フナガミサマの罰が当たると言われていた。

大島（福岡県宗像郡）の沖や難所と言われるような所に停泊して寝ていると、アヤカシ（怪異）が出て船乗りを苦しめると言っていた。しかし、艤のトライが魔よけというわけではないが、トライをくぐって船に乗り込んでは来ないとされた。

初めて船に乗り組んだ者は、海士ヶ瀬（豊北町）などの難所を通過する際に、年輩者に命じられてツンブリコ（前方転回）をしていた。理由は分からぬが、昔からのしきたりだと聞いている。

伝承者Kさん

フナダマサマとかフナガミサマと呼ばれる神靈に対する信仰は、三見浦のほとんどの漁師の方が伝承されている。そして、その御神体らしきものが、船大工棟梁によって船の特定の場所に納められると認識されている。

以下では、実際に三見浦において船建造に携わってこられた船大工棟梁から伺った伝承を記す。船建造のどの段階で、どこにどのような物が納められるのか、また、漁師がフナダマサマとかフナガミサマと呼び信仰の対象としている物が、船大工棟梁にはどのように認識されているのか等に注目して調査は行った。

Kさんは昭和初年の生まれ。

奈古（阿武郡阿武町）に生まれ、船大工棟梁の父親について修業し船大工職人となる。当初は父親と共に木造船を建造していたが、昭和40年頃から三見浦に造船所を構え、約25年間木造船の建造と修繕を行ってきた。三見浦で造船を始めた頃には、やはり奈古出身の叔父にあたる人（故人）が、浦の西に唯一軒造船所を構えて木造船を建造していた。

造船時には、職人と二人で作業を行っていた。三見だけでなく、大島（萩市）や野波瀬（三隅町）の木造船を合わせて50隻以上建造している。

造船儀礼

カワラズエ

カワラ（船底材）をはぎ合わせて整形し、造船所の船台に据え付けた際に、カワラズエとよばれる儀礼が行われる。一般的には、大安の日の午前中に、造船所で、船大工棟梁と船頭とその家族とが参加して行われる。

まず棟梁が、船頭が用意した魚（刺身）をカワラの真中の三所に数切れずつ置き、それにやはり船頭が用意したお神酒を三度ずつ注ぐ。そして、フナガミサマに作業と安全と良い船の完成を祈願する。その後一同でお神酒をいただき、その場で小宴を催す。

お神酒と魚の他には何も供えない。家大工は儀礼に際して大工道具を供えることが有るが、船大工は一般的には供えない。フナガミサマに祈願する際にも、別に唱え言を唱えるようなことはない。

ナカダナイワイ

ナカダナ（中棚）とかカジキと呼ばれるカワラに接する舷材の整形取り付けが終わったら、ナカダナイワイ（中棚祝い）が行われる。日柄の良い日の午前中にこれを行う。船頭が造船所にお神酒と肴を持参し、船大工の棟梁と職人に簡単に御馳走をしていた。

ウワダナイワイ

ウワダナ（上棚）と呼ばれる中棚に接する舷材の整形取り付けが終わったら、ウワダナイワイ（上棚祝い）が行われる。日柄の良い日の午前中に、船頭が造船所にお神酒と肴を持参し、船大工の棟梁と職人に御馳走をしていた。

フナオロシ

船体と付属船具の総てが完成し、機械の据え付けが終わったら、大安や友引等の日の午前中の満潮前に船を進水させる。

まず進水に先立ち、その日の朝までに、船大工棟梁がフナガミサマの魂（後述）のサイコロと5円硬貨を船体に納める準備をする。船大工棟梁はサイコロを作り、サイコロと5円硬貨を納める高さ2寸、幅1寸5分、奥行き1寸の穴を、胴のイヌキの中央辺りに鑿で穿ち、埋め木を作る。5円硬貨は船頭が用意して前日に棟梁に届ける。

フナガミサマの魂は、船大工棟梁が、船下ろしの儀式の最初に、穿った穴に納めて埋め木をする。イヌキというのは、舷である上棚の下部をを支えて補強する梁の一種で、胴のイヌキで帆柱も支えるようになっていた。埋め木の上に木片を当てがって、その上から金槌で数回叩きイヌキ

の表面と段差がつかないように密封する。そして棟梁は、フナガミサマを押し船の安全と大漁を祈願する。槌で叩く回数を気にしたり、唱え言を唱えたりするようなことはない。フナガミサマの魂を用意することや、それを納めることを秘密にするようなこともない。

続いて、八幡宮宮司が祝詞を奉上して船の御祓いをする。船頭はこの時にフナガミサマを押し、船の安全や大漁を祈願する。そしてフナガミサマに供えたお神酒を、宮司や棟梁をはじめ船頭やその家族などが一同でいただいて船を下りる。その前に棟梁はお神酒を船体に三度注ぎ、続いて船を下りてお神酒を海に3度注ぐ。船を淨めるという意味と、船を進水させる海を淨めるという意味と、竜宮様に船の安全と大漁を祈願するという意味があるとされる。

フナガミサマへの供え物は、お神酒の他に、紅白のオイワイ（重ね餅）、魚（鯛）、昆布、スルメ、米、やはりオイワイと呼ぶ大きい撒き餅、小さい撒き餅等で、船頭が用意する。これらは進水の儀式が始まる前に船に乗せるが、必ず右舷から乗せて胴のイヌキの近くに供え、終了後に左舷から下ろしていた。大工道具を供えるようなことはない。

関係者が船から下りたら、いよいよ船を進水させる。この時テゴニン（手伝いの人）は、船頭が用意した紅白の手拭を身につけ、カカリオミキと呼ぶお神酒をいただいて作業に取り掛かる。進水させたら船は岸に着け、再び棟梁がフナガミサマを押し、その後一同でお神酒をいただく。そして船の表と艤から、棟梁と船頭と職人と船頭の家族（息子）とが、それぞれオイワイと呼ぶ大きい餅を一つずつ撒き初める。その後に関係者が多数の撒き餅を撒く。その際、船頭の年の数だけコヨリを結びつけた5円玉も撒かれる。

餅撒きが終わったら、機械を始動して試運転を行う。港や造船所の沖を右回りに3回まわっていた。左にまわることはなかった。昔からの習わしで理由は分からぬ。

進水時や餅撒きや試運転が終わった時に、船頭が海に放り込まれることがあった。潮で淨めるといっていた。大島では、船頭だけでなく、船大工の棟梁や船頭の妻も海に放り込まれていた。

進水させる船の表には、頂部に笹を残した竹竿に日の丸の旗とフライキ（船旗）を結び付けたものを立てる。艤には幟旗を立てる。そしてこれらの間にロープを張り、親しい者から贈られたフライキを結び付け満艦飾とする。所によってはこれらにお多福の面や扇子やタッコロガサ（竹皮の笠）を下げていたが、三見では旗やフライキや幟だけで船を飾り進水を祝った。

フナガミサマ

フナガミサマの魂として、桧で自作した3分角位のサイコロ1個と、穴を開いた小銭（5円玉）を船頭の年齢と同じ数だけ、胴のイヌキに穿った穴に収めていた。他に納める物はない。サイコロは一の目が上になるように、また艤に三の目が向くように納める。桧の余材で作る。船頭の年齢によっては納める小銭が多くなるので、穴を少し大きく穿っていた。

サイコロや小銭をフナガミサマの魂とする理由は分からぬ。造船技術と共に造船に関する様々な儀礼も父親から習得したが、これらの物を魂とする理由は聞かなかつた。昔からの習慣と理解している。一の目を上にして納めるのは、漁で良い目が出て一番漁ができるよう願つてのことではないかと考える。

フナガミサマの魂は、一度納めたら入れ換えるようなことはない。廃船にするまで埋め木を開けることもないので、フナガミサマの魂については不明とする者が多いのだと思う。

船大工棟梁の父親は、フナガミサマは船の魂のようなものといつてゐた。そして、フナガミサマを納めて船を進水させる時には、父親は潮で身を浄めていた。また、父親や年配の漁師は、フナガミサマは女の神様ともいつてゐた。女の神様だから、船に女を乗せるともめ事が起きると聞いている。他に四つ足（動物）を船に乗せてはならないということを、やはり年配の漁師から聞いたことがある。いつ頃から、どのような理由でフナガミサマを祀るようになったのか等のフナガミサマに関する具体的な伝承は、父親からは聞いていない。

奈古で父親と共に造船を行つてゐた頃には、女が造船所に入ってきたら塩を撒いて浄めていた。母親などは用事で度々造船所に入って來ていたし、女が入るのを禁じていたのではないが、棚板を曲げる際に板が割れないように浄めるといつてゐた。

1994年3月5日 印刷
1994年3月20日 発行

萩市郷土博物館研究報告
第 6 号

発 行 萩市郷土博物館
萩市江向525-4
印 刷 桜プリント企業組合
山口市旭通り1丁目1-6

